
最終機動戦士 ガンダム

defective article

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終機動戦士 ガンダム

【Nコード】

N8754J

【作者名】

defective article

【あらすじ】

ジオン帝国の作った13機のモビルスーツ。アムロ・レイら三人の若者によつて強奪された機体は13番目の機体「ガンダム」であつた……。原作設定も何もかも崩壊した、スーパーロボット風味のガンダム物語。

ガンダム

宇宙世紀0079、1月2日。月の反対側にあるコロニー国家（サイド3）「ジオン共和国」は突如として「ジオン帝国」を名乗り、地球圏の統一と、地球連邦軍への宣戦を布告した。強大な軍事力を隠し持っていたジオン帝国ではあったが、数の上では連邦に負けることは目に見えていた。

故に帝国元帥にして、真の帝国の指導者ギレン・ザビは圧倒的な性能を持つ戦闘兵器を作り出した。

その名をモビルスーツ、といった。モビルスーツは全てで13機作られた。30〜50メートル級の大型機動兵器。また、それを基にして作られた10メートル級のプチモビルズ。これらを全面的に投入したサイド5（通称ルウム）で発生した最初の戦闘において、三倍以上の数を誇る連邦軍を下し、宇宙における覇権を奪い取った。ことを重大に思った連邦軍もまた、モビルスーツへの対抗策を練ったが、どれも失敗に終わった。

連邦軍大将ヨハン・エイブラハム・レビルは若者たちで構成された特殊任務班を、帝国へと侵入させ、モビルスーツを奪う計画を極秘裏に進めていた。

9月23日、遂にレビルは計画を実行に移し、30名の特殊隊員がジオンへと潜り込んだ。作戦名「V作戦」……。この時、連邦はすでに地上の三分の一を奪われて劣勢であり、敗戦ムードが地球圏を包んでいた。

アムロ・レイは、優秀な兵士、ではなかった。技術は文句なしに一流だが、その態度は頂けなかった。非常に暗く、任務に忠実であるとしなかった。だからであろう、特殊任務とは名ばかりの「ゴミ掃除」に出されてしまった。本人としても、通常の任務は退屈であつたし、敵機体の奪取など、胸躍るではないか、という心境でし

かなかった。

快樂主義者、それがアムロ・レイの本質であった。

特殊部隊は三人ずつに分けられて行動している。彼らの奪取するマシン。それは三人で乗り込むロボットであるからだ。

「何処のロボットマンガだ」

そう、彼自身も言っている。彼の仲間はハヤト・コバヤシとカイ・シデン。彼に負けず劣らずの問題児だ。士官学校時代、三人合わせて三馬鹿と言われていたほどであった。にもかかわらず、軍に居られるのはひとえに彼らの実力であろう。

そんな彼らはジオン帝国の秘密次元衛星ルナツ―にいる。彼らは今日、敵の秘密基地へと忍び込み、敵兵器をいただこうと考えていた。無論、計画などない。力押しで行く。彼らの実力なら可能だ。

煙草をふかせて歩くアムロに駆け寄る二つの影。小柄な男と、ほそい、長身の二ヒルな男。

「やるんだろ、アムロ」

細身の男、カイが話しかけると、不敵に笑うアムロ。残りの二人も口を釣り上げて、笑う。

「連邦も、ジオンも知らない、俺たちは俺たちだ」

「そうだが、大将」

「やってやろう！」

盛り上がる三人に近づくジオンの兵士。

「お前たち、うるさいぞ！所属はどこだ？！」

ガチガチの軍人がふたり、ライフルを持って歩いてくる。

「いえ、自分たちは・・・」

ハヤトが人当たりよく接する。その間に、二人は武器を取りだし、兵士に襲いかかる。カイのナイフが一人の喉をかき切る。血が噴き出す。それを見て、咄嗟に兵士は銃を構える。だが、その兵士の額にアムロの拳銃が火を噴いた。兵士は眉間に穴を開け、倒れる。カイは兵士の服で血をふき取る。それを嗤って眺めるあとの二人。

「よし、行くぞ」

誰からともなく走り出す。そんな三人をジオン兵が見つけ、銃を発砲する。だが、あたりはしない。アムロの拳銃が火を吹き、兵士をなぎ倒す。ハヤトの拳が兵士の顔にめり込む。よろけた兵士の首をかき切るカイ。

「おい、Bブロックに奴らを通すな！」

士官の声が響く。

「馬鹿め、教えてヤンの」

カイが呟く。そうしているうちにそのBブロックに着いてしまう。

「ハヤト」

「おう」

手榴弾を取りだし、アムロが投げつける。敵がひるんだすきに、ハヤトが近くのコンピュータをハッキングする。

「アムロの作ったウイルスなら…」

ウイルスが基地内に流れ出す。そうして、基地の全システムが掌握される。

「ハッハ、やった！」

「ようし、ハヤト、扉を閉めろ」

扉が閉じて、アムロ達と兵士たちが遮断される。満足げな三人は、コンピュータを眺める。

「それで、例の物は？」

「このブロックの地下だな・・・」

「ようし、行くぞ。奴らも急いでここを破るだろうしな」

「おう」

「ああ」

三人は地下に続く階段を奔ってりて行く。エレベーターなどない。ただ、階段の身が続く。

「くっそ、なんだってんだよ」

「悪態付くなよ、カイ」

「そうだですぜ、カイさん」

「へっ」

「目当てのものはあれかな？」

三人の視界に映る三体の機械。より急いで駆け降りる三人。そしてそれを眺める。

「知っさいヒト型と、戦車タイプに、砲撃戦用機か・・・？」

アムロが呟く。

「おっし、俺あのキャノンな！」

そう言っつて砲撃戦型に乗り込むカイ。

「俺は、あれかな」

戦車型に乗り込むハヤト。

「・・・こいつ、か」

武装の身受けられない他の二機より小型の機体に渋々乗るアムロ。

三人が乗り込むと、突如、上から爆発音がした。

「っ！来たか」

頭上よりプチモビルが降りかかる。量産型機ザック。低コストながら、兵器としての力は戦車や航空機などよりも高い。とはいえ、10メートル程度の機体。アムロ達の乗る機体は40メートル近く、アムロの機体は20メートル級。負けるわけではない。

「試させてもらっぜ」

カイの声が響く。カイの機体の両肩のキャノンが火を噴く。ザックたちが爆発していく。

「弱いぜー！！」

「よーし、俺も！」

戦車型もその両肩のキャノン、先端のマシンキャノンが敵を落としていく。

「武器は」

アムロがコンピュータを操作する。画面に武器が写る。機体を動かし、その背部より、棒を抜く。そこから、ビームの刃が発生する。「近接武器か、おもしろい！」

小柄な機体が虫のように群がるザックを斬りはらう。

三機による攻撃により、一方的な殺戮が行われる。

「もつと手ごたえのある奴いねえのか?!」

そう叫ぶアムロ。しかし、直後に驚くアムロ。センサーが頭上より恐るべきスピードで繰る機体を察知したからだ。

「何だ、こいつは!?!」

「アムロ、あいつは!?!」

「赤い、彗星か!?!?!」

三人が驚愕する。その頭上には赤い、40メートル級の機体、モビルスーツが立っていた。

「まさかな、私の目前でこのようなことが起ころうとは……」

若い男の声がする。赤い機体のモノアイは不気味に輝く。

「私の顔に泥を塗った報いは受けてもらう!」

「シャア・アズナブル……!?!?!」

連邦内でも、その名は語られている、ジオンのエース。赤い彗星。その名は戦場を翔けるその赤い機体と、その驚くべきスピードから来たあだ名だ。

それが目の前に居る。

冷や汗がアムロの額に流れる。だが、アムロは恐怖など抱いていない。歓喜にあふれる顔、身体は武者ぶるいが止まらない。

「へへへ、彗星か、じゃあさ……」

アムロの機体が武器を構える。残りの二機も戦闘態勢に入る。

「落としてやるよ、俺らがな……!?!」

ガンダム

シャアの機体、ザザクー。深紅の機体は見るものを戦慄させる。最初のモビルスーツとはいえ、その性能は未だに超えるものはない。アムロ達の強奪した機体であつても、だ。

「ちい、新型とはいえ、奴には敵わないのかよ！」

吠えるアムロ。余裕の笑みを浮かべるシャア。この男、いかなる戦場であるうとパイロットスーツを着ない。余程自信のある現れであるう。

「フフ、腕は悪くないが、まだ若いな・・・それでは私には勝てない！」

カイ、ハヤトの攻撃をくぐりぬけてアムロの機体の目前に迫る。ビームサーベルで応戦しようとするそれを蹴り付け、腰に携えたヒートホークを構える。

「新型とはいえ、奪われるのはたまらん。ここで破壊する！」
振り上げるザザクー。

「なにか、ないのか!？」

ここにきて焦り始めたアムロ。その目に映る、文字。

GUNDAM

「ガン、ダム・・・？」

モニターに映るそのコードを入力するアムロ。何が起こるかなど知らない。ただ、目の前の状況を打開したかった。

突如、コクピットが光り出す。それは他の二機も出会った。

「!!!」

「なんだ!？」

「おおう?!?!」

『モード、ガンダム発動』

三機に響き渡る機械音。三機からエネルギーの波が解放たれる。

「何だ、この波動は・・・?!」

シャアの驚きの声をよそに、三機は光を発する。

突然変形する戦車と砲撃機。戦車は変形していき足のようなものと胴のようなものになる。砲撃機は二つに分かれて、腕のようなものへと変形し、戦車の胴に合体する。そこにアムロの小型の機体に変形した小型のパーツ群がそこにとり付いて行く。そして、機体は光に包まれる。

コクピット内で、アムロは震えていた。

「なるほどな、三人で乗り込む兵器、こういうことか・・・!!」

歓喜のアムロ。その瞳は無邪気な子供のそれである。

「おもしろいな、ガンダム・・・!!」

変形が終了したそれは、シャアのザザクーを大きく上回る巨体を去らす。2対のV字アンテナ、緑色に光り輝く顔を上げて、赤い彗星を見る。シャアはその機体に畏怖の念を覚える。

「何という、プレッシャーだ・・・!!」

コクピットの中、拳を握りしめる。これは、ここで潰さなければならぬ。帝国のためにも・・・!!

「ええい、喰らえ!」

最速の一撃を繰り出すザザクー。目にもとまらぬスピード。だが、アムロには見えた。敵の攻撃の機動が、手に取るように、ゆつくりと。

「遅い!」

スローモーションの中避けるガンダム。ザザクーの影が通り抜ける。

「何っ!?!」

「今度は、こちらの番だ・・・」

武器を探すアムロ。示されたのは両腕の球体。それを入力する。

『アトムクラッシュ、発動・・・圧縮原子最大チャージ・・・』

「何、チャージ?くそ・・・」

「どうやら、その外見はこけおどしのようなのだが、憂いは立つ！」

再び迫りくるザザクー。アムロは今度は避けられないと悟り、ガンダムを両腕を庇うように動かす。

その瞬間、腕より光の盾が現れる。

「馬鹿な、ビームシールドだと？」

シャアの驚愕の声。それに笑うアムロ。チャージ完了と点滅する画面。

「勝った・・・！！」

迷いなく、画面を操作し、その武器を解放する。

「見せてみる、ガンダム！！貴様の力をなあ！！」

ガンダムは両腕を頭上に掲げる。赤く、禍々しく光り輝く掌、両腕の球体もまた輝き、唸る。

ガンダムの顔の口のような部分が開く。そして、それは唸った。

おおおおおおおおおおおお！！！！

そして、その腕をザザクーに向かって振り下ろす。その腕より、

巨大なエネルギーが解放される。

「・・・っ！拙い、な」

咄嗟に動かすシャア。コクピットこそ外れたが、その攻撃はザザクーの機体の半分を消し去った。跡形もなく。綺麗なまでに焼き払われたその部分を、シャアは驚愕の表情で見ていた。

「・・・何という、性能・・・。あれは悪魔か？！」

アムロは舌打ちをしていた。もう一度あの攻撃をしようと画面を見るが、まだチャージ中だ。

「くそ、止めを・・・」

そこにセンサーからの知らせがあった。三機のモビルスーツの反応。さすがに分が悪い。

「せっかく手に入れたおもちゃだ。ここで失くすわけには・・・」

右手を顎にあて、親指の爪を噛む。いらいらとするアムロは、渋々、機体を動かし、三機から遠い場所へと逃げるように去っていく。

その姿を、中破したザザクーのコクピットから見るシヤア。

「・・・・・・・・」

屈辱に燃えるその顔は彼の美しい顔を歪めていた。

「・・・ガンダム・・・！！！！」

そしてそれが消えた方向に向かって叫ぶ。

「忘れんぞ、今日の屈辱を・・・！！」

ガンダムはルナツーを脱し、近くに潜伏していた、新型艦ペガサス4へと向かっていた。そのコクピットの中でアムロは宇宙を見ていた。拳を握っては開く、それを繰り返しながら、アムロは宇宙を浮遊する。

「さあ、面白いことになりそうだ・・・！」
ただ、笑っていた。

> i 4 4 9 4 — 7 7 2 <

ペガサス4

ペガサス4。連邦軍が建設した新型戦艦。カテゴリーとしては強襲揚陸艦とされている。単独での大気圏突入能力を持つ、ペガサス級の4番艦。それを任されているのはブライト・ノア中佐である。士官学校を出て5年。しかしながら、彼がここまで出世しているのは軍の人材不足、ということだ。

ルウムの会戦で主だった將軍・士官のほとんどを失い、そのほかの將軍は連邦軍本拠地ジャブローに潜ってしまった。自分たちは戦場に出たくはないが、士官は不足している。そのため、大出世を遂げたのが、ブライトら、士官学校での若手将校たちであった。

ブライトとしては、艦長になるにはまだ若い、と思っていたが、渋々軍命を了承した。

彼の初の任務は奪った新兵器のジャブローまでの移送である。護衛艦隊など付いていないし、艦にある戦力は航空機セイバーフィッシュ数機である。この程度の戦力で何をなせと言うのか、と内心では怒鳴っているブライト。だが、表面にその感情は見せない。指揮官の迷いは周囲の兵士たちに感染していく、そう言ったのは、今は亡き恩師、パオロである。カタブツの彼は、その教えに忠実であった。故に部下からの信頼も既に勝ち取っていた。そんなブライトにある報が来る。

「艦長、本艦に連邦のシグナルを発する機体が向かってきます」

「ん、数は？」

「ひとつ・・・40メートル級です。V作戦を、成功させた、とのこと」

「まだ、成功はしていない。この作戦の終わりはジャブロー到達なのだからな...よし、ハッチ開け、受け入れ態勢に入る」

「了解。ハッチ開きます」

その独特の形状の艦のハッチが開く。この艦はモビルスーツなど

のような大型機の収容も可能となっている。このような事態を見越してレビルが大金をはたいて作ったのだ。無駄になっただけだったものではない、というのが高官たちの意見であった。

ブライトは迫る機体を見た。禍々しい形相だな、と腕を組んで見ていた。これ一機で戦局を打開はできるのか、そう思わずにはいられない。

「着艦完了」

「よし、航路を地球の北アメリカへ。突入後、我々はジャブローに向かう。オスカ、パイロットを呼び出せ」

「了解」

そう言って、ブライトは艦橋の指揮官席に深く腰を下ろした。

アムロが機体から降りると、カイとハヤトがいた。

「アムロ、なに一人でやってんだよ！」

「仕方ないだろ？俺の機体がメインシステムなんだから」

先の戦闘のことだろう。気が散ってはいけないと、通信機器は切っていたのだ。

「んにしても、ガンダムとはすごいな」

ハヤトが感心したように見上げる。

「これがあれば、勝てるぞ、奴らになあ」

アムロが言う。にやりと笑う三人。そんな三人はブリッジを目指す。この艦の艦長殿にご挨拶する。三人の歩いているのを兵士たちが見るが、顔をしかめた。まず、恰好がだらしない。そして素行が悪かった。彼らの印象は最悪だ。

そんなことを意にも関しないアムロは、途中一人の女性兵士を見た。金髪の髪、儂げな美女の姿を。

「お、アムロ。どした？」

何かを見ているアムロに尋ねるカイ。いつもならここでふざけるが、それはしない。アムロの視線は美女に向かい、心もまたどこかに行っていた。

「いや、別に…」

そう返すのでやっとだった。そうして、美女の方から目をそらし、歩きだす。三人のその後ろ姿を、金髪の美女はただ見ていた。

三人は敬礼していた。だらしない恰好も治っている。目の前にはブライトが深くシートに座している。

「アムロ・レイ少尉であります」

「カイ・シデン准尉であります」

「ハヤト・コバヤシ准尉であります」

「ん、私がこの艦の艦長、ブライト・ノア中佐だ。楽にしてくれ」
そう言われると三人は足を開き、両手を後ろで組む。軍隊での楽にする、とはつまり、「休め」の姿勢ということだ。さすがに上官に逆らうことは彼らとてしない。こんなところであれを下ろされてはたまらないからだ。

「それで、君たちはジャブローに着くまであれに乗ってもらうが、構わないか？」

ブライトが尋ねる。三人の中では一番階級の高いアムロが一歩進み出て言った。

「構いません、中佐殿」

「・・・そうか」

そして一歩下がるアムロ。

「それで、あの機体に着いて何かわかつているのかね？」

「あのモビルスーツはガンダムといい、ジオン帝国の開発した第13番目の機体、であり、通常は三機に分離して運用されます」

「分離？するとあれは合体する、ということか」

「はっ」

「・・・」

ブライトはこのマンガだ、と言いたいが、堪える。

「それで、その力は？」

「強大です。シャア・アズナブルの駆るモビルスーツザクーを中

破させました」

「ほおう・・・」

ブライトは感心する。それほどの兵器とは。

「・・・まあいい。あとは我々があれを調べる。君たちは疲れただろう。部屋を案内させる。出撃あるまで休んでいたまえ。ご苦労であつた」

そうしてブリッジを出る三人。カイとハヤトは艦をぶらぶらすると言って別れた。案内なしで迷わないのか、とは思わない。その辺で適当な女性兵士をナンパするのだろう。この時代は女性の兵士も少なくはないから、ナンパが実現する。男たちとしては喜ばしいことだ。とはいえ、軍規もあるため、ほどほどにしなければならぬ。アムロは自室の案内を待っていた。すると、あの金髪の女性兵が現れた。アムロの前に立って敬礼する。

「セイラ・マス曹長です。お部屋まで案内します」

「そう、よろしく」

そう言つて先導するセイラは金髪を眺めるアムロ。手を伸ばしたい、と思うが止めておく。まだ初対面である。こういうのは、あせらずゆっくりと、だ。そう自分に言い聞かせるアムロ。

部屋に着くと、その説明をされた。一通り説明をされて、最後に、とセイラが言った。

「何か、ご質問は？」

「君の、部屋は？」

そう、笑つて言うアムロ。さわやかな紳士でも気取っているのか。セイラは若干目を細める。

「それは命令ですか？」

「いんや、兵士間交流、さ」

「・・・」

押し黙るセイラ。しばらくして、ため息を吐いて行つた。

「Cブロックの505です」

「へえ、近いな。今度何か御馳走するよ。それじゃ、ありがとう」

「失礼します」

やり取りが終わると、セイラは去って行った。その後ろ姿を見てアムロが呟く。

「いいなあ、決めた。ジャブローに行くまでに彼女を手に入れてやる」

扉を閉めて、ベッドに転がる。そして取り敢えず、休息を取ることにした。何をするにもまずは休んでからだ。そう思い、転がったアムロはすぐに睡魔に襲われて眠ってしまった。

ペガサス4

ペガサス4のブリーフィングルームには、ブライトと例の三人他、セイラや技術士官たちがいた。モニターには、例の奪取された兵器モニターの前に立つ青年技術中尉ジョブ・ジョンが説明をする。

「まず、敵の兵器ガンダムですが、三体の準モビルスーツの合体によつて構成されていることがわかりました」
画面が変わり、カイの機体が映し出される。

「カイ准尉の乗る、砲撃戦型のGマグナムは、両肩のマグナムキャノン、両手のフィンガービームガンが主装備です。主に中近接射撃用です。ガンダム時は主に腕部分にあたります。次に・・・」
戦車型の機体が映る。

「ハヤト准尉の乗る、Gタンクはバルカン、ビームガン、マシンキヤノン、スーパークヤノンと言った、圧倒的火力を持った機体です。ガンダムのベース部分となります」
再び画面が変わる。

「最後はアムロ少尉のGプラスター。武装はビームサーベルのみですが、圧倒的機動性を持っています。ガンダムのコアとなります」
画面の中に三機が現れて、合体する。ガンダムに変形してそこで止まる。

「ジオン第13番目のモビルスーツ、ガンダム・・・。この機体の性能はブラックボックスばかりです。エネルギー源は不明。また、アムロ少尉の話した強力な攻撃が何なのかも不明です」

「兵器としての信用性は低い、な」
ブライトが呟く。頷くジョブ。

「はい。とはいえ、我々の戦局を有利にしてくれるであろうことは・・・」

「うむ。とはいえ、な・・・」

三人は特に何も思わない。ただ、戦えればそれでいいのだ。

「三名とも、運用には気をつける」

「はっ」

三人が姿勢を整え、返事をする。

「では、解散」

そう言つてブライトが部屋を出る。技術屋たちも、解析のために部屋を急いで出て、ハッチに行った。ハヤトやカイもいつの間にかいなくなっている。つれないなあ、と思うアムロは未だに金髪の美女が残っていることに気づくと、そんなことは頭から消えた。

「や」

手を上げて彼女に話しかける。少し釣り上った目が彼を見る。

「なんでしょう、少尉」

「いや、君のことが知りたくってね」

「・・・」

アムロの士官学校でのナンパの仕方である。こうやってお近づきになつてあわよくば、ということだ。それなりに成功はしていたため、女の扱いはこんなものだ、と、タカをくくっていたアムロ。

「機械の扱いはうまくても、女性の扱いは下手ですね」

「あらら？」

そう冷たくあしらわれてポカンとするアムロ。セイラは部屋を出て行つた。

「つれないな・・・」

だが、これで諦めるアムロではない。彼女の後ろを追いかけて、横に並ぶ。艦内はそれなりの広さであるため、並んで歩くのは簡単だ。

「スキんシップの一環で、下心はないんだがね」

「・・・」

「ま、いいや。俺はアムロ・レイ。１９歳。出身はサイド７」

「珍しいんですね、スペースノイドですか？」

「生粋のね」

軍にはスペースノイドは少ない。たいていの軍人がアースノイドだ。理由としてはやはり、宇宙に居るものがなぜ地球のために、という

ことなのだろう。ハヤトもカイもスペースノイドではない。

「今度はそっちの番。教えてくれないかな」

「・・・セイラ・マス。19歳。出身はサイド6です」

「へえ、同年か」

アムロとしては少し年上かと思っていたが、そうではなかったようだ。はつきり言って、年上には興味はないし、年下も興味はない。なかなか同年代で好みに合う女性も少ない。アムロは好みにうるさい男だった。

「へえ、そんなじゃ・・・」

そこで突然、アラームが鳴る。緩んでいた態度を変えるアムロ。セイラもまた緊張する。

『敵機がこちらに接近中！乗務員は持ち場に着け！繰り返し・・・』

「どうやら、今はここまで、か」

そう言ってハッチに向かいだすアムロ。その背中に声をかけるセイラ。

「少尉、ご無事で」

間の抜けた顔をするアムロだが、不敵に笑って親指を立てる。

「女神のご加護が付いてるみたいだな、こりゃ」

そう言って宙を蹴る。そして、曲がり角でアムロの姿は見えなくなった。

ハッチでは大忙しで作業員が出撃の準備をしている。まだ勝手のわからない三機の敵兵器。

「敵は？」

アムロは先に来ていたカイに聞く。ハヤトもそこに駆けつける。三人はパイロットスーツを着ている。標準仕様の黄色とは違いアムロのみ白いものを着用している。これはアムロのパーソナルカラーのようなものだ。

「どうやら、ザックどもがわんさか。それと、モビルスーツが一機」
「こちらの戦力は？」

「俺たちのあれだけさ」

そう言って作業中のGマグナムに向かっていくカイ。作業員と一言二言会話をすると、コクピットに乗り込んだ。

「俺たちも行くか」

「そうだな」

それに倣って二人も自分の乗機に向かう。

ブリッジではブライトが三人にモニター越しに会話していた。

「いいな、ある程度敵を倒したら引け。我々の目的はジャブローにそれを移送することなのだからな」

『了解』

そういつて回線を閉じるパイロットたち。

「マーカー、敵は？」

「あと30条で射程に入ります」

「よし、三機を出撃させる。その間とにかくこの艦に肉薄されるな！」

だんだんと暗い宇宙に緑色の小さなザックの集団が見えてくる。

「来たな……」

コクピットで舌なめずりをするアムロ。カタパルトに機体を移動させ、射出態勢に入る。前方ではGマグナムとGタンクがいて、先に射出された。

「タンクは空間戦闘できるのか？」

そう、ハヤトは作業員に聞いたが、可能らしい。とはいえ、機動性能は保障できないというレベルだが。

射出されるGブラスター。身体に衝撃が来る。だが、アムロにはどうということはない。士官学校ではずいぶんやらされたし、無茶もしてきたのだから。

漆黒の宇宙では緑色のザックがいる。しかし、肝心のモビルスーツはいない。警戒しながらも居アムロはビームサーベルを構え、小さなザックたちを斬り伏せる。他の二機の攻撃もあり、宇宙は閃光

で包まれる。宇宙が光るとき、それは惑星、もしくは人の死の瞬間、ということだ。宇宙での爆発だから、パイロットは生きることはいかない。この瞬間では、ザックは棺桶でしかない。

「……！来るか」

センサーに反応するモビルスーツの反応。アムロはザックを切り裂くと、その方向に視線をそらす。

そこには、あの時の深紅のモビルスーツ。

「シャアか……」

「幸運だな。まだ、ガンダムではない」

修理された機体の中でシャアは笑っていた。プライドを傷つけられた男は歓喜に震えていた。

「ここで貴様を打ち取らせてもらっ、姑息な連邦軍の犬よ」

モビルスーツ用バズーカを構えるザック。アムロは汗を流していた。だが、まだ余裕があった。

「あれはまだ本調子ではない。これなら……勝てる。行くぞ、アムロ」

そしてGプラスターがザックに向かっていく。

ペガサス4

「アムロめ、突出しすぎだ！カイ、ハヤト、援護に回れ！」

ブライトが怒鳴る。弾幕を張り、ザックの接近を赦さないペガサス4。ザックたちもだいたい数は減っていた。防衛に関してはもう、カイ、ハヤトの力はいらない。ブライトはそう判断し、命令を下した。一方のアムロは戦力差を埋めようと、血気盛んに攻め込んでいた。ザザクーは修理により本調子ではないだろう、という判断がアムロを湧き立たせる。とはいえ、アムロはシャアという男をいささか見くびっていた。彼がこんなことで手をこまねく人間ではない、ということだ。

「踏み込みが浅いな、連邦のパイロットよ！」

ザザクーの巨体がGブラスターを蹴り付ける。アムロは咄嗟に避けるが、弾き飛ばされる。壊されなかったのはひとえにアムロの操縦センスだろう。だが、経験の差は愕然としていた。

「ガンダムでなければ、恐るるに足りんな」

ヒートホークを構え、真空を翔けるザザクー。赤い軌道がアムロに迫る。

「よう、アムロ。困ってるかい？」

カイのお茶らけた声。ふと見ると、GマグナムとGタンクが向かってくる。

「ちい、足止めにもならぬか！」

シャアが舌打ちをする。プチモビルズでは話にならないことはシャアとて知っていたが、まさかこうも早く援護に来るとは。

「私も、甘く見ていた、か」

若さゆえの過ち、か。それは若さの特権であるが、戦争ではそうはいかない。シャアはキツと目を細める。

「使いたくなかったが、仕方ない」

ザザクーの右腕が変形する。それを見るアムロ達。

「ヤバいな…」

「仕掛けてくる気か？」

警戒するハヤトとカイ。アムロはそんな中、ザザクーの右腕を黙って見ているだけだった。

「おい、アムロ！」

「・・・わかつている、だが。まだだ」

ガンダムになるのは早い。ブラックボックスの多いガンダム。それを使うにはまだ、早い。

「ガンダムにはならんか、よかろう・・・消し去ってやる・・・！」
完全に変形したザザクーの右腕。それは大きな爪をもった細身の腕であった。その指をはちきれんばかりに開き、エネルギーが集束する。

「オーバードライオブ、チャージ完了・・・行くぞ！」

震えだす、腕を抑え、ザザクーが飛翔する。狙うは三機の奪取された兵器。

「宇宙の塵となれえ！ガンダムウウー！！！」

「・・・今だ！」

アムロが目を見開き、ガンダムのシステムを発動させる。

それと同時に放たれるエネルギー。三機が合体を始めるが、エネルギーが向かう方が早い。

「遅い！私の攻撃を防ぐことは、もはやできぬ！」

「うぬう、ガンダムが！」

ブライトが唸る。艦内でも動揺の声が上がる。

そんな中、セイラは一人、宇宙を眺めている。その瞳に絶望など微塵もない。

「・・・若き戦士たち、その向かう先は破滅か・・・」

呟く女性の金髪は神秘の輝きを放つ。

コクピットの中、何かを感じるアムロ。向かい来る閃光はゆつくりと見える。そう、ここはガンダムの中なのだ。

「・・・」

その目には先ほどまでとは違う光が宿っている。指を鳴らし、握る手に力を入れる。そして一気に腕を動かす。そして、そのまま、閃光に突っ込んでいく。

「玉砕する気か？」

シヤアが言うが、アムロにその気はない。両腕よりビームのバリアーが張られる。均衡するパワー。閃光はガンダムによって防がれている。あれほどの一撃を受け止める存在に戦慄を覚えるシヤア。

「一体、ガンダムとは、何なのだ?!」

シヤアはザザクーを駆り、接近する。ヒートホークを構え、今なお閃光を受け止めているガンダムに振り下ろされる。

だが、片腕でそれを受け止めるガンダム。片腕でエネルギーを受け止めながら。

「化け物め!」

それはシヤアだけの思いではない。ブライト、ハヤト、カイ、皆同じ思いだ。疑念を感じていないのは、アムロと、そしてセイラだけである。

アムロは機体を動かし、その腕をザザクーに打ち込む。ザザクーの胸を貫く腕。痙攣するように体を震えさせるザザクー。そのコクピットでシヤアは打ち震えていた。血を吐きだし、目頭を押さえるシヤア。その目には、涙が溢れていた。

「うう、私は、ここで・・・」

ザザクーの巨体が爆発に飲み込まれる。あっけない彗星の最後をペガサス4、そしてガンダムの中から見守る者たち。その思いは様々であった。

アムロは何かを感じている。巨大な意思のような何かを、ガンダムから。ガンダムとは何なのか、それはわからないが、こうして戦っていくしかない。それが、兵士の役目なのだから。

「俺は戦っただけだ、他に考えるべきことはない」

自分にそう言い聞かせるが、心のどこかで彼はそう思っていないことを知っている。もやもやした感情を抱えながら、アムロは帰還する。

戦場の跡にはただ、敗者の屍と鉄クズだけが浮いていた。その戦場をペガサス4はあとにする。

ペガサス4（後書き）

まさかのシャア退場。取り敢えず、ガンダムにかなうものなし。

ジオン帝国

赤い彗星が墜ちた。その報はジオン帝国に衝撃をもたらしした。シヤア・アズナブルは帝国民にもよく知られたジオンの英雄であり、子供たちの憧れであった。その整った顔や、放つ雰囲気にも多くのものが魅了されてきた。その英雄の死を、素直に人々は受け入れられなかった。

ガルマ・ザビもその一人だ。彼は帝国軍大佐であり、シヤアとは同期の一番の親友であった。彼はザビ家の末弟であったが、特別扱いをせず、同等の友人として接してくれた。主席と次席の座を取りあつた仲でもあり、家族以上に彼を信頼していた。

だから、彼がモビルスーツのパイロットに選ばれた時、彼は嫉妬の念ではなく、激励の気持ちがあつた。本来は自信が乗るはずだつたザクラーを、シヤアにならば譲つてもいい、それが彼の思いでもあつたからだ。

そのシヤアが死んだ。信じられない思いである。地球にある攻撃指令本部をすぐさま発ち、ジオン帝国本国コロニー「ムンゾ」に向かう。そこで真偽を、そして今後の対策を確かめるために。

シャトルの中、ガルマは何も発しなかったという。彼の顔には悲しみの身が現れていたという。

ジオン帝国総帥ギレン。ザビ家の長男にして、ジオンの実質的支配者。幼い皇帝、ジオン・ズム・ダイクンの摂政であつたが、今や軍も政治も取り仕切るようになった。隠居している父や、妹キシリアとその信奉者などは未だギレンに対して反感を抱いているが、帝国は彼の意のままであつた。

その彼は大円卓に座っていた。巨大な円卓には、ジオンの主だつ

た將軍や大臣たちがいた。ギレンはおもむろに口を開ける。

「諸君も知つてのとおり、シャア・アズナブルが戦死した。これにより、シャア中佐は二階級特進で准将となった。准将の死を、今は痛もう」

そう言つて目を閉じ、手を胸に置く。それに従う人々。それは死者を悼むジオン式の儀式である。一分の沈黙ののち、ギレンは目を開く。

「シャア准将は奪われた十三番目のモビルスーツ、ガンダムを取り返すために連邦軍艦ベガサス4を襲撃した。ザザクーとザック4小队という、大きな戦力を裂いた。にもかかわらず、部隊は全滅した」
「今更13番目のモビルスーツを、それも秘密裏におつくりになられたのはなぜです？」

ギレンにそう質問したのはキシリア・ザビ少将である。ギレンの妹にしてガルマの姉。そして、反ギレンを唱える少数派のトップ。その隣のガルマは兄妹の言い争いが始まることを察して顔を青くし、ギレンの隣のドズル中将に顔を向ける。ザビ家の三男のその大男はガルマに首を振る。

「連邦を完全に崩壊させるための保険、ということだ」

「ほう、まだ12番目のグレートジオングもできていないと言つのに、作り始めた理由はそれですか？」

「・・・何が言いたい？少将」

「あのガンダム、何か他の目的があるのでは？」

ざわめく円卓。ギレンはただ机を叩く。場が静寂に包まれる。

「なにはともあれ、まずはあれを取り戻さねばならない」

「その役目、ぜひ私に！」

ガルマが立ち上がる。それを横目に見てギレンは言う。

「モビルスーツ相手に戦うには分が悪い。ガルマよ、今は耐えるのだ」

「しかし、兄上・・・！」

「これは、命令だ」

くつ、と顔を歪ませ座るガルマ。ドズルの顔が同情をはらんで見つめている。

「ふむ、ペガサス4の現状の航路では北米に降りるつもりだろう」

「単艦で突入する、と？」

「レビルめ、小癪な」

口々にする將軍たち。ドズルが兄に耳打ちする。

「その航路ならば、あの男が最適だろう、兄貴」

「うむ、蒼き巨星、ランバ・ラル」

ギレンは笑う。ドズルはそれに恐怖を覚えながら、兄を見る。腹の底の見えない兄。ギレンはただ薄ら笑っていた。キシリアの睨みさえ、彼は何とも思わない。彼の理想の実現、それを果たすためにガンダムには働いてもらわなければならない。

（アムロ・レイ・・・精々足掻くがいい。逃れられぬ宿命からな・・・）

会議後、帝国ではシャアの慰霊式典が開かれることとなった。英雄の死。それを知らしめ、帝国全体の士気を上げる。シャアの死すら、ギレンにとってはその程度なのである。そんなギレンに怒りを覚えさえするガルマ。今すぐにその復讐を成し遂げたいが、そのための力は彼にはない。

悔しさから腕を握り、それで壁を殴り付ける。何度も、何度も。

拳からは血が出ている。だが、彼は止めない。

「力さえ、あれば・・・！」

「ほしいですか？」

「！！？」

後ろを振り向くガルマ。立っているのは謎の仮面の男。漆黒の仮面からは無機質な何かを感じる。

「ガンダム、それを打ち倒す絶対の力を」

その光景をギレンは笑って見ている。全ては計画通りだ。彼の盤

上で全てが動いている。支配者はその感覚が気持ちよかった。

疑念

ペガサス4では相も変わらず作業員は大忙しで働いている。必要最低限の人数しかいないペガサス4では特に忙しい。休む間などない。アムロ達も、敵と遭遇すれば真っ先に駆り出される。宇宙はジオンの勢力圏である。故に遭遇する確率が高い。幸い、シャアとの戦い以後、モビルスーツは現れてはいない。

戦闘を終え、自室に帰るアムロ。個室に着いているシャワーを浴びる。バスローブをはおり、ベッドに倒れこむ。

「疲れたな、だが、生きている」

そう言うと、ニヤリと笑う。楽しそうである。命のやり取りを、彼は楽しいと感じていた。ガンダムでシャアを倒した時の違和感をもつ、彼は覚えてはいない。

勝利の余韻を感じながら、アムロは眠りに就く。

一方悩んでいるのは作業員である。ガンダムはアムロにしか動かせない。カイにもハヤトにも動かせない。何か特別なプログラムがあるのかとも思ったがそれはジャブロー到着まで待つこととなった。報告を受けたブライトは、部下にアムロの経歴の調査を命じた。何かがある、と彼は踏んだ。ガンダムも、それを動かすアムロも、何かがあるのだと。

三機に分離し、納められているガンダムのパーツ。その中で一機だけ、瞳を光らせる機体があった。それはGブラスターであった。「なーんかなー」

カイ、ハヤト、ジョブの三人がそのGブラスターを見ている。三人とも飲み物を片手にリラックスしている。

「アムロのおまけだよなー、俺ら」

カイとハヤトの愚痴に付き合っているジョブ・ジョン。彼にも仕事はあると言つのに、二人とも愚痴を流す。

とはいえ、技術屋のジョブとて、ガンダムがおかしいのは知っている。エネルギー源は不明。あの破壊力、防御性どれをとっても非常識極まりない。一体ジオンは何を思っただけで作ったのか。ぼんやりと眺めながら、適当に相槌を打つジョブ・ジョンであった。

ところ変わってジオン帝国。帝国首都ムンゾの邸宅にキシリアはいた。24歳であり、その美貌と知略は多くの国民の知る所である。不正を嫌い、悪を断行する。そんな彼女には、このジオンと連邦の戦いが分からなかった。兄ギレンは帝国の支配と、人類のより良い未来のため、と言っている。だが、それは本当なのか？

ガンダムの性能は異常だ。その上、ブラックボックスも多い。兄が何らかの秘密を持っているのは明らかだった。13機のモビルスーツ。それはいったい何なのか？

「少し、探りを入れるか」

キシリアはそう言う、己の懐刀と言っても過言ではないある人物を邸宅に呼び出した。数分後その人物がやってくる。

「珍しいですね、キシリア」

「事情が少し複雑すぎるのでな」

やってきた人物は蒼い髪的女性であった。

「なんとかして連邦の軍艦pegasus 4に潜入してもらいたい。できるか？」

「フフ、お任せあれ。このマ・クベの腕を信用してください」

につこり、と笑う女性。相変わらずだな、とキシリアは肩をすくめる。お互い様です、とま・クベが返す。

「久しぶりに酒でも飲もうか。またしばらくはこうして会うこともあるまい」

「そうですね。もちろんおごりですよ」

「私にたかるものなど、お前ぐらいたぞ？」

翌日。マ・クベはムンゾを出て、単身地球に向かう。もともとあるキシリアの連邦との交流を生かし、彼女はペガサス4に至るだろう、と確信していたキシリア。そこでガンダムの性能、そしてギレンの野望を見極めなければならない。

見送ったキシリアのもとにガルマが来る。ひどく顔は痩せていたが。

「姉上。私も地球に戻ります」

「そうか。顔色が悪いが大丈夫か」

「御心配には及びません」

そうか、と返すキシリア。ガルマはそうして地球に戻っていく。

そのガルマは、新たな力を手に入れていた。そう、ガンダムを倒す力を。

「モビルスーツ、ドーフムーン・・・これで私は、友人の無念を果たせるであろう！」

その端正な顔が歪む。その顔は力に魅せられていた。

疑念（後書き）

まさかのマ・クベ女性化。今後いたいどうなるのか・・・。

グレートスター

ペガサス4は現在、地球の大気圏突入を前にしていた。効果ポイントとは北米大陸。ジオンの勢力下も近いものの、直にジャブローに行くとその場所がばれる恐れがある、ということ指定されている。とはいえ、味方の増援がいるわけでもない。下手をすれば突入と同時に落とされる、ということもある。今現在、突入の準備をしているこの時間にも襲われたら、一巻の終わりである。

いつでも出撃できるように、アムロらはコクピットで待機している。コクピットの中にはグラビアの写真などが貼ってあったり、模型の本があったりと、パイロットの性格をよく表している。とはいえ、そうでもない戦争などできない。軍人をやっているのも半ば仕方なくである。三人の行動を咎めるものはいない。

ブリッジ。ブライトは気が気でない。いつ敵に襲われてもおかしくない。それに本当の試練はこれからなのだ。大任を果たせるのかどうか、それだけが気がかりだ。胃がキリキリする思いであった。願うことならもうこんなことはごめんだ、と心の中で叫ぶブライト。その願いは届くのかどうか。

オペレーター席にはセイラが座っている。これにはアムロが喜んだ。ムサイ男のオペレーターでは気が滅入るが、美人なら士気も上がる。それも居中の相手ならなおさらだ。カイやハヤトには俺が目をつけてるんだ、とくぎを刺した。それに対する二人の反応はこうだった。

「俺、年上好きだし」

「婚約者いるし」

前者はカイ、後者はハヤトだ。驚いたことに婚約者のいたハヤト。その発言にはアムロもカイも驚いた。意外なものだな、とそれ进行い出し笑うアムロ。

そこにアラームの音がする。

「どうした？」

『どうやら、敵みたいです』

セイラの声が答える。その向こうからはブライトの怒号。

『アムロ、カイ、ハヤト！出てもらうぞ、突入までの時間を稼げ！』
ブライトの声。それに了解の意を返すアムロ。

あ、そうだ、とアムロはセイラに行った。

「地球に降りたら、デートしないか？」

『・・・公私混同は止めてください、少尉』

そう、冷たく返される。お固いなあ、と苦笑し、コクピットに深く座す。そしてハッチが開く。

「アムロ・レイ、Gブラスター、出るぞ！」

新たに作られたオプシオン装備のライフルとシールドを装備したGブラスターが漆黒の宙に繰り出す。続いてGマグナム、Gタンクも発進する。

「敵は?!」

『モビルスーツ一機です。待ってください：前方1キロの地点に居ます』

「一機だと？なめられているのか、それとも・・・」

アムロが思案する。カイやハヤトは攻撃を始める。それに倣い、アムロもライフルを放つ。技術者たちが大急ぎで作ったビームライフル。Gマグナムの武器の応用として急きょ作られたが威力は抜群である、とジョブが自信を持って言っていた。それを迷うことなく引くアムロ。

それは当たらなかったのか、爆発の光が起こらない。漆黒の空を三機の攻撃が覆う。そんな中、それらを避けながらこちらに向かう、青い一つの影。

赤いモノアイを輝かせ、ごつごつとした体のそれは三機に向かって突進する。それを避ける三機。

「なんだ、あいつ?!」

「モビルスーツ、ですよ」

「わかってんよ」

カイとハヤトが言いあっている。攻撃の手は緩めずに。なおもそれを避ける青い機体。巨大な剣のような角は蒼く光り輝いている。左手をアムロ達に向けると、そこから何かが放出される。

「これは・・・」

「核反応?! まずいぞ!」

アムロは咄嗟に避けるが、カイ、ハヤトは間に合わずに被弾する。

「カイ、ハヤト!」

「ダイジョブだ、さすがモビルスーツだな」

「敵の兵器ながらあつぱれたよなあ」

そう、お茶ら蹴る二人。安心するアムロ。しかし、敵は攻撃してくる。今度は背中より、何かを取りだす。剣の柄だけであり、刃のないそれを握ると、オレンジの光が巨大な刃を形成する。

「剣、か・・・」

当たれば、ひとたまりもない。だが・・・。

「要は当たらなければ、どうということはない!」

アムロはそう言って突撃する。機体のサイズのにも、運動性的にも、負けることはないと判断したためだ。ライフルを捨て、シールドを片手にビームサーベルを構える。それを振り下ろすGブラスター。

だが、巨大な剣はそれを受け止め、その身軽なGブラスターを一振りで弾き飛ばす。

「パワーが、ケタ外れた...!」

身をもってそのことを知らされるアムロ。目の前の青いそれを見る。ごつごつした外見からは、とてつもない闘志が感じられた。それは、戦場の戦士の生きざまであった。

カイ、ハヤトも回復したのか、攻撃を再開する。しかし、その巨大な剣がそれらを受け止め、切り裂く。ビームすらも切り裂くその姿に、初めて恐怖を感じる、アムロ達。

これが本当の戦いなのか。そう、感じる彼らに、振り下ろされる刃。青い魔人のモノアイは赤く、不気味に光り輝いていた。

グレートスター

振り下ろされる刃を止めたのは何であったのか。青いそれは剣を納める。そして、それより声が聞こえる。

『その程度の力しかないのか、連邦のパイロットよ』

「な、にい？」

挑発するように、その声は言った。男の声であった。

『彗星を落とした猛者と言ってもこの程度か。話にならん』

腕を組む眼前のモビルスーツ。堂々としたその姿は自信にあふれていた。

『見せてみる、ガンダムの力をな』

ガンダムになるまで待ってやる、ということなのか。そのまま動かないそれ。三人の意思は一致していた。

「舐めてくれるな！」

「やってやるぜ」

「モード、ガンダム！」

三機が合体する。その間ですら動かない青いモビルスーツ。数秒後にはガンダムが完成する。ガンダムはモビルスーツの前に立つ。

『ほう、それがガンダム、か。おもしろい、見せてみる、お前の力を！』

再び剣を取りだすモビルスーツ。斬りかかるその刃を左腕で受け止める。ビームシールドが形成される。

『ぬう・・・！』

さすがにこの一撃を受け止められるとは思ってはいなかったろう。そのパイロットが呻く。

「これで終わりではないぞ！」

アムロは刃をはじくと、両腕にエネルギーをチャージする。

「アトムクラッシュで、決める・・・！！」

ガンダムの最大武器。それで消し済みにしてやる。アムロはチャージを開始するが、それを見逃す相手ではない。

『隙ありい!』

左腕から放出される核エネルギー!。ビームシールドを張り防ぐが、そのためにチャージは中断される。

「これでは、決定打が打てない!」

『終わりだ、ガンダム!』

知らぬ間に急接近し、剣を振り下ろしているモビルスーツ。その太刀筋は正確にガンダムを一刀両断できる。ビームシールドでは、防げない。攻撃手段も、ない。もはや、ここまでか。

そうアムロが思った時、声が脳裏に響いた。

『まだ、終わってはいけない。ここで終わっては、いけない』

(誰だ!?)

『目覚めなさい、そして戦いなさい、ガンダム・・・アムロ・・・』

!』

「!!!ぐああああああ!」

頭を押さえるアムロ。脳裏に響く痛みに呻く。操縦が隙だらけになる。そこに剣が振り下ろされガンダムをそのまま切り裂いた。しかし、その機体は残像のように消えた。

『?!残像、だと・・・』

青い戦士はあたりをくまなく探すが、その姿はない。

『何処に・・・』

直後、その頭上から高エネルギー反応がする。

『上、だとお?』

「遅い・・・」

静かな、不気味すぎるほど静かな声でアムロは言った。ガンダムがその両腕を掲げている。不気味に光り輝くそれからは、とてつもない力が感じられる。

「死ね・・・かけらも残さず、冥府へと落ちるがいい・・・」

ガンダムの口が開き、宇宙の中で吠える。より膨れ上がるパワー。

「アトム・・・ジエノサイド・・・！」

そのまま咆哮を上げ、振り落とされるパワー。それは真つすぐ青い機体に向かう。

『何という、禍々しい・・・』

それを見て言うパイロット。回避行動を取り、確実にそれを避ける。だが。

「これで、終わりだと思うなよ」

再びその両腕にエネルギーが集まる。あれほどの攻撃を行ったにもかかわらず、再び撃つのか。

驚愕が戦場を支配する。青い機体は身をひるがえす。

『よもや、このランバ・ラルが戦場より逃げかえろうとはな・・・』
そう言い残し、最大出力で戦域を離脱する。それを見るとアムロはチャージをやめた。

戦闘時のあの感情の高ぶりはもはやない。アムロは誰にともなく叫んだ。

「何なんだ、ガンダムとは・・・！」

彼の叫びは虚しくコクピットに響いただけであった。

あのモビルスーツのパイロットは自分の母艦に帰還する。そしてコクピットから降りてくる。まだ十分に若い筋肉質の軍人が現れる。それを出迎える若い女性。

「いかがでしたか、ガンダムとやはらは」

「ふむ、あれは化け物だよ。ハモン」

そう答える男。フフ、と笑う女性。

「青い巨星をそこまで追い詰めるものとは・・・」

「まいった、だが」

男が戦いのあつた方向を向く。

「強大な敵であればある程、戦いというものは面白い」

「本当に、あなたらしい」

そう苦笑するハモン。言うな、と笑うランバ・ラル。

「ガンダムよ、次に会った時は我がグフアーの前に切り裂いてくれよう」

青い巨星はそう言って、ハンガーを後にする。

一時の休息

妨害こそあったが、ペガサス4はその後、大気圏の突入を無事果たす。効果ポイントにも敵はいなかった。連邦勢力下のキャリフォルニアベースに彼らは向かった。今現在までの入手したデータを渡す、ペガサス4の修理など、色々目的はあったが、一番の理由は乗組員たちへの休みを与えるためだ。目に見えて疲れている乗組員を見て、ブライトが連絡を取ったようだ。彼もたまには、肩の荷を下ろしたいであろう。

ベースの基地にペガサスが下りると、乗組員は街に繰り出た。ハヤトやカイは親しくなった乗組員の一段と昼間早々から酒飲みに行った。アムロも誘われたが、断った。彼にはやるべきことがあるからだ。

ペガサスから降りてふと、歩いていると揺れる金髪を見つける。彼は目当ての人物を見つけると、早歩きで近づいて行った。その相手は勿論、セイラであった。

駆け足で近づくアムロに気付くと、セイラは振り向いた。凜々しい顔には何の感情も浮かんでいなかった。

「お約束通り、お食事でもいかがです？」

お茶らけて言うアムロ。断られたら、その時はその時。やけ酒でもするか、と思い声をかける。少し思案したのちに、セイラが言った。「いいですよ」

これにアムロは心の中で大喝采の嵐である。適度に店は調べてあるアムロは、彼女と肩を並べて歩き出す。

ブライトはある人物に会っていた。その人物は鮮やかな青い髪をした女性であった。

「マ・クベ少佐、ですか？」

「はい、ブライト・ノア中佐」

そう言って握手をする二人。艦長室の椅子に座る二人。

「ジャブローより通達され、本日付けで配属されます。副長、として任官されましたので、よろしく」

「はぁ・・・」

「失礼ですが、お歳は？」

「24歳です、少佐」

「私も同じ歳ですので、敬語は結構ですよ」

「・・・そうですか」

そうは言っても、初心なブライトにはそれはできない。おかしそうに笑うマ・クベ。

「あと、ジャブローからの預かりものです。試作のプチモビルズ、だそうです」

「もう、完成していたのですか？」

「残念ですが、まだ試作のものでしかありません。ですから・・・」

「この部隊で、試せ、と」

「そう言うことですね」

モルモット部隊、ということだ。ますます肩の荷が重くなるブライトはただ、ため息をついた。

ガルマ・ザビ大佐は北米の攻撃指令官である。そのガルマは地上のニューヨークに居た。手に入れたモビルスーツ、ドーフムーンを眺めていたガルマに報告が来る。執務室にガルマは移動し、椅子に座す。

「何、シャアを打った部隊が降りた、と？」

ガルマが話している相手はランバ・ラル少佐である。宇宙よりの通信でノイズはひどかったが、その報告はよく聞こえていた。

『は、恐ろしく強い機体であります。私も地上に降りますので、出迎いの準備をして頂きたい』

「了解した。では」

そう言つて通信を切るガルマ。その直後、その顔が大きく歪む。

「来たな、ガンダム。待っている、シャア。君の仇は私が直々に晴らして見せよう」

そう言つて拳を握るガルマ。そこに違う通信が来る。

「イセリナか・・・」

地上に共に降りてきた婚約者。シャアと士官学校に居たところに知り合い、それ以降付き合つて来た女性である。この戦争さえ終われば、二人は結婚する予定である。彼女が訪ねてきたという。

「そうだ、私は負けられぬ。シャアの仇を討ち、イセリナを幸せにするためにも」

若き男は静かに闘志を燃やす。

「となれば、仕掛ける。ジャブローに入られてはたまらん」

そう言つて立ち上がる。とはいえ、まずはイセリナに会いに行こう。そうしてガルマは執務室を出て行った。

一時の休息

昼飯、ということでアムロとセイラが入った店は洒落た若者向けの店であった。宇宙世紀にはいつても、なんら人々の生活様式は変わらない。アムロは椅子を引いてセイラに座るよう促す。セイラが座ると自身も座る。

ウェイターがやってきて二人が注文する。アムロはこしばらくまともに飯を食っていないので、常人よりも多く頼んだ。

「パイロットも、お辛いでしょうね」

そうセイラが言った。その言葉使いにアムロが少し顔を歪める。

「セイラさん、今はプライベートな時間なんだし、敬語は止めないか？」

「・・・わかったわ」

呆れたように笑うセイラ。食事が来るまではまだ時間がある。アムロは世間話のつもりでセイラに聞いた。

「どうして、軍に居るんだい？」

しかし、セイラは答えない。何を思ったかアムロは言った。

「おっと、俺から言った方がいいか。それが礼儀ってモンか」

そう、頬を掻いて言うアムロ。

「俺は前にも言ったがスペースノイドだ。コロニーで生活していたが、最低な生活を送って来たよ。親父は何かの研究に没頭していて、ろくに俺を見向きもしなかった。お袋は夜の仕事と言って昼からいないし、いたとしても親父以外の男が横にいたよ。子供心に分かっていたんだ、この家庭が崩壊しているってな。」

だが、それでもよかった。愛情なんかいららないし、それで俺に害はなかった。だが、ある日、親父が酔って帰ってきてな、言ったんだ。お前は俺の子供じゃない、ってね。

そうして俺をぶった。何度も何度も。訳のわからない喚き声と共に。お袋も帰ってきて、それに加わった。お前さえ、いなければ、

ってな。俺は思った。死ぬかもしれない、ってな。だから隙を見て親父の書斎に逃げ込んだ。その棚に銃が隠してあるのを知っていた。俺はそれを掴んで二人を」

指を銃のようにしてこめかみにあてバーン、と撃つしぐさをするアムロ。セイラの顔は若干青い。

「それで、親父は連邦軍の研究者だったわけで、それを殺した俺は連邦軍の更生施設に入れられた。その施設は士官学校にエレベーター式でね、なるべくして軍人になった、ってことだ。カイやハヤトとは士官学校で会った。だから、俺のこの身の上話は知らない」

「……………」

「それを打ち明けたってことは、俺は本気だぜ？」

「……………ずるい人ですね」

「そうやって生きてきたんだ」

さて、とアムロが言った。

「あんたの身の上はまた今度にしようか、ご飯が来たようだしな」
ウェイターが食事を持ってくる。それをセイラはわずかに視界に収め、安堵する。何を、安堵したのかは本人にもわからなかった。

「ガルマ様……」

「やあ、イセリナ」

そう言っただけで笑顔で手を振るガルマに、近寄る女。まさに令嬢と言っている、その女性こそ、彼の婚約者である。

「近づくか、攻撃を指揮なさるとか……大丈夫でございますか？」

「フフ、心配には及びますまい。私は必ずや、勝利します。亡き親友、シャアに誓ってね」

「ガルマ様……」

「そう、心配なさるな。ただ、願っていただきます。あなたと私の輝かしい未来を」

そう言っただけで、彼女の髪をなでるガルマ。うつとり、と顔を染めるイ

セリナ。

「はい・・・」

「では、失礼します。戦の準備をしなければなりません。これが終わったら、ぜひお食事にでも」

そう言つてガルマはその場を去る。彼にはやるべきことがある。忌むべき存在、ガンダム。その破壊。

「ラル少佐は明日、降下か…それを待つか、待たぬか…」

ガルマは思案するが、彼とて男であり、武人であつた。一人でガンダムを打ち取りたい、という野心もある。

「今日、仕掛ける…今なら、まだ奴らも疲労を回復してしまい」

ガルマは配下の爆撃飛行大隊に出撃を命じ、自らもドーフムーンに登場した。この距離から行くならば戦いは夜戦であろう。

無数の爆撃機と航空機がキャリフォルニアベースへと向かう。それを夕日が真っ赤に染めていく。

激闘のキャリフォルニア

さすがに皆休息を終え、ペガサス4に戻っていた。時刻は深夜。寝静まる街の中に突如として警報が鳴り響く。

「何だ？」

ブライトが怒鳴る。眠りこけていたオペレーターがすぐに起き、状況を確認する。

「ジオンの航空部隊です。数およそ・・・120です！」

「何い?!」

「待つてください、モビルスーツの反応が！」

「っ!!」

マ・クベがブリッジに入ってくる。

「ガンダムと、あれを出しましょう」

「あれ、つまりあの試作機を?しかし、パイロットが・・・」

「私が出る」

マ・クベがそう言った。佐官が前線で戦うことにはブライトが驚いた。

「しかし、もう一機は・・・」

「私が乗ります」

そう言ったのはセイラであった。

「出来るのか？」

「マ・クベ少佐に教えてもらいましたので」

「そうか・・・」

そう答えて手を振るブライト。行け、ということだ。二人がブリッジを出る。

ブリッジの外。ハッチに向かう中、二人は話していた。

「まさか、あなたが来るとはね、キシリア様の命令？」

セイラがそう、マ・クベに聞く。

「さすがに、わかっていますか」

苦笑するマ・クベ。

「しかし、よろしいので？」

「ええ、戦うことは定められています。早いか、遅いかの違いです」
「・・・」

「それが私の運命です。気にはしていません」
そう言つて黙りこむセイラ。

二人の眼前に見えてくる機影。10メートル級の機体である。

「これが・・・」

「はい、連邦の作った試作プチモビルズの一号機と二号機・・・。
Gミールです」

「Gミール・・・」

「キシリア閣下が作られていた可変型プチモビルズ、それを連邦側に提供し、完成に至りました。とはいえ、まだ試作機です。我々はガンダムの支援、艦の護衛程度しかできません」
「十分です」

セイラ達はそのコクピットに向かう。

アムロ達は一足先に出撃していた。Gマグナム、Gタンクが対空攻撃を行い、ジオンの航空機を落とす。ジオンの主力航空機ドップ。武装こそ貧弱だが、コストパフォーマンスや機動性には定評があった。また、大型爆撃機ガウ。その存在により、キャリフォルニアベースは火に包まれた。連邦軍の戦車は次々と破壊されていく。

「くっそ、なんてえ数だ！」

カイが愚痴る。ハヤトもこりこりだ、という顔で敵を打ち続ける。

「ちい、ライフルも弾切れか・・・」

Gブラスターはライフルを捨てる。そして背部のビームサーベルを抜く。

「空中戦だってできるんだぞ！」

そう言つて跳躍するGブラスター。赤い刃がドップを叩き斬る。

「まだまだあ！」

そうして剣を振り続けるアムロ。ドップが墜ちていく。

『おい、アムロ！モビルスーツがこちらに来る！ガンダムで応戦しろ！』

「ガンダムを使えば、ここの防衛は減りますよ、中佐」

『お前は気にしないでいい、ただ、モビルスーツを止める、いいな！』

「了解」

そして、反応の近い方角へと向かう。Gタンク、Gマグナムが追いつく。

「行くぞ、カイ、ハヤト！」

「おう」

「よっしゃあ」

「モード、ガンダム！チエエンジイイイイ！」

それぞれの機体がガンダムを形作り、合体が完了する。そしてそこで敵が現れるのを待った。

「さあ来い！叩きのめしてやる」

両腕にエネルギーをチャージするガンダム。初めから勝負を決めるつもりである。

「はああああああああああああ！！！！」

腕を大きく振りかぶる。あとは敵が来るのを待つだけだ。

「！おい、アムロ、ミサイルがこっちに来るぞ！」

「何……」

カイからそう言われて、チャージしていたエネルギーをシールド防御に回す。大量のミサイル群がガンダムを襲う。

「……！ナパーム弾だぞ、ふたりとも！！」

ハヤトがそう叫ぶ。

「畜生！チャージしたエネルギーが……」

「く、来るぞあ……」

目の前の廃墟より巨大な影が躍り出る。それはホバリングをしな

がら、ガンダムに向かってくる。月の光と街を覆う日に照らされ、その漆黒の機体がアムロ達の前に姿を現す。

「ぐああっ!!」

突進してきたそれに弾き飛ばされるガンダム。それに追い打ちをかけるように、背中にあるミサイルパックから大量のミサイルを撃つモビルスーツ。シールドを張る暇もなく、ガンダムの装甲が削られていく。

「な、・・・!!」

「なんていう威力だ!」

驚愕するアムロ達。なおも、それはミサイルを放ってくる。

「好きにやらせてなるものかよ!」

アムロがガンダムを起こさせ片腕でシールドを張る。もう片方の腕ではチャージを開始していた。

「受けてみる! 最大パワーではないが・・・」

そして片腕を突き出す。

「アトムクラアアアあツツシュー!!!!」

放たれるエネルギー。だがそれはモビルスーツの前で弾かれる。

「何だ!？」

「強力な偏向フィールドが出ている! これではあれに当たらない・・・!!」

アムロ達はなす術がない。

『フフ、このドーフムーンに手も足も出ないか、ガンダム!!』

響き渡る声は、復讐に燃えるガルマ・ザビの声であった。

激闘のキャリフォルニア

じりじりと追い詰めてくるドーフムーン。

『聞こえているか、連邦のパイロットよ！私の名はガルマ・ザビ！ザビ家の男子にして、貴様らを倒す男だ！！』

高らかに宣言するガルマ。

『貴様らはもう終わりだ！このドーフムーンは月のエネルギーにより半永久的に活動することができる。すなわち、貴様らに勝ち目はないということだ』

ガンダムが這い上がる。そこにミサイルが撃ち込まれる。爆風でガンダムが飛ばされる。

『だが、この程度では殺しはしない。我が友の受けた辱めを受けてもらうぞ、ガンダム！！』

胸部が開く。そこには三つの放射口があった。

『トライパニッシャー・・・超高压縮ビームを放ち、どんな物質だろうと溶かす、このドーフムーンの最強武器！』

そこにエネルギーが充てんされていく。

『くそ、動けガンダム！動けえ！！』

叫ぶアムロ。しかし、ガンダムは答えない。

『ふふはははは、お終いだな、ガンダムう！！』

月の光の下、両腕を広げるドーフムーン。胸部のそれは膨れ上がる一方だ。

『どうすれば・・・』

『望みなさい、力を・・・』

『！？お前は・・・』

いつかの頭に響いた声。アムロが驚く。だが、その言葉に耳を傾ける。彼は心の底で望んだ。絶対的な力を、目の前の状況を打開する力を。

『与えましょう、あなたに、祝福を・・・』

その言葉の後、ガンダムのシステムが変化を遂げる。右腕に膨大な力がたまっていく。

「これは？」

『木星エンジンフル稼働』

機械音声がそう告げる。右腕に収束するエネルギー。

「ええい、ままよ！」

そう言つて突撃するアムロ。右腕より、ビーム状の巨大な剣が現れる。

『何だ！？』

驚いたガルマはトライパニッシャーを放つ。三つの光弾がガンダムに向かう。

それはアムロにはゆっくり見えた。右腕の剣を振るい、一つを斬る。即座にもうひとつも斬り、残りの一つを回避する。それは零コシマの世界での動きであつた。

『馬鹿な・・・』

愕然とするガルマのドーフムーンに肉薄するガンダム。

「喰らえ、ガンダムソーリーード！！」

エネルギーの刃が巨大な剣となり、ドーフムーンを襲つ。なす術もなく、一刀両断されるドーフムーン。

「シャア、イセリナ……！！」

閃光の中、ガルマはそう言つて散つた。空を舞うドーフムーンの体。そして爆散する。

「勝つた、だが、何なんだ、この力は・・・」

アムロは呟いた。あの光の剣はもはや存在していなかった。

ガンダムは踵を返し、今だ戦闘の続くペガサス4の方向に向かう。大量のドップとガウ。

「一気に相手にするのは気が引ける。一撃で終わらせる！」

そう言つてチャージを開始するアムロ。それを見て突撃してくる敵。だが遅い。

「喰らえ！アトムクラッシュ！！」

閃光が、包んだ。幾多の命が一瞬にして夜の空に消えた。絶望の光がジオン帝国を全て消し去っていく。

「恐ろしい力だな……」

マ・クベが呟く。セイラはただ、それを見ていただけであつた。

「ガンダム、いったい……？」

「希望、ですよ」

セイラが言った。

「あれが希望……？あなたは一体、何を……」

「……」

マ・クベの問いに沈黙で返すセイラ。

何が起きているのか、何が起こるのか。マ・クベには想像もつかない。

夜は明けていく。

激闘のキャリフォルニア（後書き）

ガルマ、あっけなく死亡。これからどうなるかって？わかりませ
んw

木星の影

ジオン帝国では、ガルマ戦死の方がもたらされていた。シャアの時同様、若き英雄の死を帝国民は悲しんだ。

帝国の中枢メンバーが集まったの会議では、ドズルが目をついた。豪傑なその男は巨大な体を揺らし、泣いていた。

「ドズルよ、悲しんでもガルマは帰っては来ぬぞ」
そう言うギレン。なおも泣くドズル。

「しかし、しかしなあ、兄貴・・・俺はガルマは、俺を部下として使える立派な男になると信じていた・・・それが、こんなところで・・・」

「閣下、もはや事態は深刻です。モビルスーツを全てさし向けてでも、ガンダムを奪うべきです」
そう進言したのはコンスコン少将である。ドズルの腹心の一人である。

「それはならん。何故ならまだパイロットが見つかっていない」
そう言ったのはカーウェイ技術少将である。表向きはモビルスーツの開発は彼の管轄下で行われている。

「ならば、ロールアウトした分でも・・・」

ここでギレンが口を挟む。

「ガンダムに対してはランバ・ラルと新たに送るもう一人にしばらくは一任される」

「もう一人、とは？」

「ザン・ヴェール少佐だ」

「となると、ズーゴックですか・・・」

「そうだ、いかにガンダムといえど、水中戦ではズーゴックにかなうまい」

「うまくいくでしょうか？」

「そのためにラルがいる。心配は無用だ」

そこで会議は終わった。この後はガルマの国葬である。シャアの時以上の規模で行われる予定だ。

「閣下、よろしいので？」

黒づくめの男がギレンに尋ねる。無言でうなづくギレン。

「計画はうまくいくでしょう。問題は木星圏の地球連邦軍の動きですな」

「・・・若き指導者、パプテマス・シロッコ、か・・・」

「はっ。あやつめの提供した木星エンジン・・・それにより我々はモビルスーツを手にし、人類の革新のための計画を立てましたが、あちらの意図が分かりません・・・」

「フラナガン。奴は地球圏には来ないであろう。しばらくはな。その前にけりをつけたい。グレートジオングはどうなっている」

「完成度24パーセント・・・まだ、時間はかかりますな」

「そうか・・・」

「イフリート、ギャンガー、ゲルググ、ギガンクはまだパイロットが下りませなんだ・・・」

「パイロット識別システム。これもまた、シロッコの技術、か・・・」

「ギレンはこれを作った天才が何故、力を貸すのか理解できなかった。だが、彼は利用される気はない。逆に利用し返してやる。ギレンとはそういう男なのだ。」

「まあいい。ガンダムが計画の最終段階にどこまでいけるか、だな」
「はい」

ザン・ヴェール少佐。ルウム戦役以降、モビルスーツ「ズーズゴック」に乗り、救国の一員として知られる。だが彼としては国のためではなく、渋々働いているにすぎない。もとは海賊行為を生業としていて、牢屋にぶち込まれた。そこに運よく軍の新兵器のパイロ

ットに、ということで釈放された。

街中のモニターには大々的にガルマの国葬の様子が映し出されている。モビルスーツ、ドーフームーンの敗北。二機目のモビルスーツの敗北により、今度は彼が出撃しなければならなくなった。

「はん、面倒だな・・・」

煙草をくわえて、街を歩く男。無精ひげで顔は覆われている。向かった先は宇宙港。ここに彼の相棒はいた。

「ようし、相棒。行こうか、海賊の戦いを教えてやろうか」

ヴェールがそれを見上げる。丸いフォルム。青い機体色のその胴体とも頭部とも言えないその目が光り輝く。

そのままコクピットに乗り込み、宇宙に出るズースゴック。

「地球まで五時間か、長いなあ」

コクピットでもなお、彼は煙草をふかしている。

ペガサス4。アムロ達はGミールを見ていた。

「可変型、か。すごいな」

ハヤトが呟く。カイも驚いてみている。

「一体どこでこれを？」

アムロがジョブに聞く。

「どうやら、ジオン側の技術者が提供したようだ」

「ほう・・・」

感心したように言うハヤトとカイ。アムロは目を凝らしてそれを見る。

（ジオン？いや、違う。これは木星圏の技術だ…。シロツコ大佐、だったか。木星側もこの戦争に絡んでいる、ということか？）

木星圏地球連邦軍。一人の男が中心となっている、ヘリウムガス

運搬を目的とした駐留軍。その男の名はパプテマス・シロッコ。

（きな臭いな…。たぶん、ガンダムも、木星圏の技術を使っている）
システム系に詳しいアムロは、ガンダムのOSが木星のものを知っていた。父親がその道のプロであったため、間違いはない。

（この戦争は何だ？ガンダムとは何なんだ？）

その問いは誰にも答えることはできない。

木星の影

木星地球連邦軍の木星衛星軌道コロニー。およそ150万の人口を持つ生活圏を形成するコロニーである。キシリア・ザビはその木星を秘密裏に訪れていた。

（シロツコ・・・ギレンとも接触しているにもかかわらず、私にも接触をし、その技術の一端を見せた・・・腹が読めない男だ）

コロニーの司令官執務室にキシリアは待たされていた。とそこに一人の男が入ってくる。

「待たせてしまって申し訳ない」

青い長髪の男が不敵な笑みと共に現れる。

「いえ、それほど待ったわけでは・・・」

「フフフ・・・」

男は机に座す。

（パプテマス・シロッコ・・・）

まだ三十台にも達してはいない若き司令官。実質の木星の支配者。

（地球連邦軍でありながら、その本性はシロッコによる木星帝国・・・）

帝国の覇者がキシリアを見る。

「Gミール、では足りませんでしたかな？」

「・・・今回は一つ聞きたいことが」

「ほう、何かな？」

「ガンダム、木星エンジン、モビルスーツ・・・いずれもあなたの作ったものでは？」

「・・・」

「今回の戦争、兄ギレンが己が野望のために動いていると思っていたが、違うようだ。裏で手を引いているのはあなたか？」

「ははは・・・御冗談を」

「知っているのだぞ、開戦二か月前、あなたの手からギレンに木星

エンジンが提供されたのを！」

「・・・」

目を細めるシロッコに、大声で弾劾するように言うキシリア。

「いや、エンジンではない、それはそう、モビルスーツだったのではないか？ガンダムという名の、な！あれはギレンの作ったものではないし、まして13番目の機体ですらない。あれは始まりのモビルスーツ・・・」

「いやはや、さすがですな、キシリアどの。だが、そのようにあまりにも物事が見え過ぎるのいかなものかと思うな」

「！？ならばお前が・・・」

「正義感が強すぎましたな、キシリア・ザビ」

銃を取りだすキシリア。それをシロッコに向ける。そのキシリアの体が倒れこむ。

「のこのこ敵の場所に乗り込んできた、あなたのミスだ」

シロッコの手元の銃が煙を上げていた。キシリアの驚愕の表情。まだ生きているキシリアのみけんに銃を押し当て、引き金を引く。頭より脳が血と共に執務室を汚した。

「やれ、部屋が汚れたな」

シロッコは執務室を出て行った。

「ギレン閣下。ネズミは始末しました」

シロッコはモニターの先の男に行った。それはギレンだった。

「それはありがたい・・・それで、グレートジオング用のエンジンは・・・？」

「しばらくお待ちいただきたい。何分、プラントは小さいのでね・・・」

「了解した」

「それと、ガンダム・・・有意義に使っていただきたい」

「・・・承知している」

（フフ、承知している、か。全ては私の手の上で動いているのだよ、

ギレン)

表情は变えずにそう、シロツコは思った。

(この戦争もジュピターガンダム、その完成のためのデータ収集にすぎない。せいぜい支配者を気取るがいい、ギレン)

シロツコは木星を見た。何もないその星を見ていた。

「支配者は私一人だ」

そう、彼は呟いた。

ギレンとて、利用されているのは知っている。このままでいいわけはない。

(全てはガンダムにかかっている・・・)

「フラナガン、例のサンプルたちは？」

後ろに控える黒づくめの男に問うた。

「順調です」

「フム、そうか」

「ですが、グフアー、ズースゴックが先にあれを倒すやもしれませんぞ」

「それはないな」

「・・・」

「でなければ、霸王にはなれぬ。ということだ」

二人の支配者はその瞳にどのような未来ヴィジョンを見ているのか。それはまだ、誰にもわからない。

海戦

ペガサス4はあと半日もすればジャブローに着く、という位置に居た。そのせいか、クルーの緊張は解けていた。さすがに連邦の支配圏でジオンが襲つてはこないだろうと信じて。

「だが、その認識は甘い」

ジオン軍ザンジバル級「ガーランドウ」に乗る、ランバ・ラル。ガルマの先走りで前回はガンダムと退治できなかったが、今回はそうはいかない。ザンジバルは大気圏内での活動も可能とした多目的艦である。この艦には二体のモビルスーツと数十体のプチモビルズが備わっていた。

「ヴェール少佐。準備は良いか？」

後ろに立つ、自分と同年代の男に話しかける。二人は気が合い、ルウムでも共に戦った戦友であった。

「勿論だ、ラル少佐」

「うむ。ハモン！目標前方に艦を向けろ！その後私とヴェールが出る。部下には船の足を止めさせる！」

内縁の妻にして腹心のハモンにそう告げる。ハモンがラルを見る。

「ご武運を」

「うむ」

ハッチに向かう二人。歴戦の勇士の姿をただ黙ってハモンは見送った。

「相変わらずいい女だ。あんたがいなきや口説いてるよ」
ヴェールが笑って言う。

「フフ、貴様といえど、あれだけは渡せんな」

ラルもまた笑って答えた。

「では、行くか」

「たがいに無事であればよいな」

「全くだ」

そう言つて握手を交わす二人。手が離れると、どちらともなく己の機体に向かって言つた。

「グフアー、出るぞ！」

「ズーズゴック、エントリー！」

巨大なザンジバルの腹より、二体の青いモビルスーツが出撃した。

「ふん、海におびき寄せるぞ、ヴェール！」

「おうよ、水中戦に持ち込んでやる！」

「ちい！モビルスーツ二体だと！ガンダムは？！」

ブライトがオペレーターに聞く。

「すぐに発進できます」

「よし、艦砲射撃をしろ、その間にガンダムは出撃。Gミールにも出撃をかける、敵はこれだけではない。前方の勘の攻撃に注意しろ！」

「よくもまア、必死だな、こりゃ」

カイがコクピットでそう言う。

「気楽だな、カイ」

「そりゃそうだ、アムロ。ガンダム携帯じゃ俺らは出る幕なしだしなア」

「は、任せておけ」

アムロが自信気に言う。二体居ようと、このガンダムには勝てない。アムロはそう思っていた。ハッチが開く。

「ガンダム、出る！」

戦場にガンダムが出る。途端に海に向かいだす二体の敵。

「逃げるのか、それとも罨か？いや、倒すただけだ」
それを追うガンダム。

「フフ、ついてきおつたな」

「ラル！やるぞ！」

「うむ」

再びガンダムを正面に見据えると、グフアーが剣を突き出してくる。

「ッ、ガンダムソード！」

それを腕の光で形成された剣で受け止める。そこに蹴りを放つグフアー。吹き飛ぶガンダム。

「ヴェール！！」

そこにズーゴックの腕が伸びる。階下の海からそれは伸びてきていた。本体は見えない。

「海からか！？」

アムロが叫ぶ。機体はその腕につかまれて下に堕ちていく。

「少し、軽くしておいてやろう、ガンダム！」

そう言うてラルは剣で襲いかかる。ビームシールドを張り、それを防ぐガンダムだが、海に向かって落ちていくのを止めることはできない。どちらにしても、ヤバい状況である。

「ぐく、うそ・・・！」

大きな水しぶきが上がり、ガンダムが海へと沈む。続いてグフアーもそこに飛び込んでいく。モビルスーツはある程度の環境下でも一定の力を出せる。海の中であるため、100%ではないが。

（だが、ズーゴックは水中かでは120%の力を出せる）

コクピット中でヴェールは笑っていた。伸びていた腕を本体に収納する。そしてガンダムを見た。

「ようこそ、海へ。でっかい、でっかいお魚さんよ……」

ズーゴックは目を光らせて、ガンダムに突進してきた。

海戦

ズーズゴツクの鉤爪がガンダムを掴む。

「ちい、パワーが・・・」

アムロは絶句していた。パワーが上がらない。

「水中戦では俺のほうがつええんだな、これが！」

ヴェールが笑って言う。

「おおい、ラル！やっちまえ！！」

「おうよ！」

そうして突進するグファア。剣を取りだし切り付ける。しかし、装甲に傷がつかない。

「むぐう！水中とはいえ、まともに傷がつかないか！」

「ならば、俺のズーズゴツクで！」

そう言つて距離を取るズーズゴツク。頭部より八発のミサイルが撃たれる。

「うおおお！！」

ガンダムを吹き飛ばすが、それだけにとどまる。そこに再びミサイルを撃ち込む。

「これも駄目か、ならば！」

ズーズゴツクの頭部が展開する。中央には大型ビーム砲が備わっている。

「ポセイドンランチャー！！！！」

足を海中の地に着け膨大なエネルギーを放つ。ラルはグファアを水中から出す。巻き添えを喰らわなためだ。

「あれではさすがにガンダムも・・・」

海中を荒らした莫大ならパワーが過ぎ去った。カイ中はあれ、そこにガンダムの姿はない。

「フハハハハハハ！！やっただぞ、ラル！ガンダムを、やっただぞ！」

！ははは・・・」

高笑いするヴェール。だが、レーダーに反応があった。

「！？何！！」

「どうした、ヴェール！」

「奴が・・・」

そう言っていると、その方向より何かが来てズースゴツクの両腕を吹き飛ばした。

「な、何イいいいい！！？」

目を駆らすヴェール。その視線の先にはガンダムがいた。全く無傷で、それは立っていた。

「あ、悪魔か・・・あれは！？」

「好きにやってくれたな、ずんぐり野郎め・・・」

アムロは冷徹にモニターを睨む。

「最大出力で決めてやる！」

両腕を掲げるガンダム。その腕からエネルギー弾が上空に放たれる。カイ中より出たエネルギーがラルのグフアーを襲った。

「むあああああああつ！！？」

グフアーの機体が散っていく。爆発が起こり、グフアーが消え去る。「ラル！！」

「済まぬ、ヴェール！私は撤退する！！」

脱出ポットで脱出したラルを部下が回収する。ヴェールは安堵すると同時にガンダムに向かって再びポセイドンランチャーを放つ姿勢となる。

「当ててやる、今度こそ・・・！」

「そうそう何度も当たってやるものか！」

ガンダムが接近する。

「は、早い！？」

「違う、お前が遅いだけだ！」

ガンダムの口が開き唸る。

「ぐうっ・くええええええええええ！！！」

零距离のポセイドンランチャー。しかし、それはガンダムの張つたエネルギーの壁で阻まれた。

「ガンダムを舐めるな」

「ば、バカな……」

「喰らえ……アトムクラッシュ……!!」

原子すら破壊する大いなるパワー。それは一気にズーズゴックをパイロットごと消し去る。

「くくく……はーはっはっは、はっは、はっはっはっは！！」

高笑いするアムロ。ガンダムの機体が変化していく。

「！？何が・・・？！」

遠く離れた地、木星コロニーでシロツコは感じていた。

「第二段階に入ったか、ガンダム……いや、メイオウガンダム……」

!

忍び笑いをするシロツコ。全ては彼の計画通りであつた。

「フッフ、フッフフッフフッフ……」

動

その姿は悪魔であった。ガンダムは恐るべき怪物のような形相をしていた。そのガンダムの体から何かが墜ちる。人だ。カイとハヤトである。

「カイ、ハヤト―!」

アムロは叫ぶ。二人はに水中へと落ちた。

「糞、何なんだ、これは!？」

『メイオウガンダムへと進化したのよ』

いつかの声が頭に響く。

「誰だ…!!」

『あなたもよく知っている人、とでも言うておきましょう』

「俺の…?」

思い浮かぶのは、金髪の、あの女性。

「セイラ・マス…?」

『フフ、そうですよ、少尉』

声は、彼女は笑う。アムロは訳が分からない。

「何だ、ならなんであんたが…」

『計画は始まっているのです。人類の未来は、あなたに委ねられたのです』

「意味が…わからない」

『今はまだ、必要ありません。その時ではないのですから』

「?!」

メイオウガンダムとなったそれが動き出す。

「なんだ!？」

『求めているのです。他の木星エンジンを。それを取り込むことで真の覇王となる…』

上昇するメイオウガンダム。どうにかして止めようとするアムロ。
「止まれ、止まれ、止まれ…!!」

『さよなら、少尉。しばしの別れです』

「止まれーーーーー!!!!!!」

メイオウガンダムは空に吠えて上昇を続ける。急速にスピードを上げてそれは大気圏を突破し、宇宙へと旅立った。

誰もがただそれを見るだけで何もできなかった。

それからペガサス4はジャブローへと帰還した。もたらされたのはガンダムのデータだけであつたが、それをもとにレビルはモビルスーツの開発を始めた。

アムロ・レイは失踪した。カイやハヤトはモビルスーツのテストパイロットとしてジャブローの開発部に出向し、ペガサス4もジャブローの巡回部隊に配備された。

10月1日。Gミールが量産されて戦場に送りだされる。また試作のモビルスーツもロールアウトされた。ペガサス4にそれらは配備され、彼らはハワイ強襲作戦へと参加させられることとなった。

ハワイ。現在ジオンの勢力下にある。海を制することで地球を円滑に支配侵攻できる、と考えたギレンによって戦争初期に占拠、以後ジオンの基地となっていた。ここを落とすことで、アジア、オーストラリアへの進行ルートを確保しようとするのが連邦上層部の考えだ。

ハヤトはモビルスーツを見て言った。

「アムロがいたらなあ」

カイも頬を掻きながら同意する。

「全くね」

「このモビルスーツ、GMじゃ、出力が今一つだからなあ」

「仕方ないさ。木星エンジン作る技術は地球圏にはないんだしさ」

愚痴をこぼしても仕方がないのだ。

「にしてもホント、お前はどこにいるかねアムロケンよ…」
空を見上げてカイは呟いた。

一方のガンダムは宇宙のコロニーの一つに潜伏していた。メイオウガンダムの導くままにそこにたどり着いた。通称的さすコロニー。戦争初期に放棄されたコロニーの一つ。内部は気候の調整もされず、人の住める環境ではない。こんな場所、と思ってガンダムを動かそうにも動かせない。仕方なくアムロはガンダムを降りる。さすがにノーマルスーツなしで歩くこともままならないため、パイロットスーツのまま降りた。

「何があると言っんだ、この荒廃したコロニーに・・・」

メイオウの導く先には何があるのか。それを知るすべはない。アムロは歩きだす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8754j/>

最終機動戦士 ガンダム

2010年10月9日11時25分発行